

## JAグループ山形と沖縄

# 労働力確保へ連携

## 製糖工場 季節作業員 サクラランポに関心

サクラランポ労働力の広域的な確保に向け、JAグループ山形は3月下旬、沖縄県でJAグループ沖縄との情報交換会と、沖縄や北海道、愛媛県などを渡り歩く季節作業員を対象にした求職者説明会を開いた。サクラランポや山形の農業に関心を寄せる季節作業員がいることも分かり、本県関係者は農繁期の重ならない沖縄県との連携に一定の手応えを得てきた。



伊平屋村で、季節作業員に山形の農業労働力事情などを説明する本県JA職員

求職者説明会は、沖縄県東シナ海に浮かぶ二つの離島、伊平屋村と伊江村にあるJAおきなわの製糖工場が開いた。日勤、夜勤の休憩時間などに、伊平屋会場に20人、伊江会場に10人の合計30人の季節作業員が集まった。28人は島外出身者だった。JAさくらんぼひがしねとJAさがえ西村山、JAグループ山形地域・担い手サポートセンターの職員が、県やJAグループのリーフレットなどを配り、山形のPRとともにサクラランポの労働力事情や作業内容、JAの

無料職業紹介事業などを説明した。参加者からは「サクラランポの作業は女性にもできるのか」「今年は無理だが、来年は考えたい」との声や「サクラランポの収穫期は過ぎてしまいが、8月以降の求人があれば山形で農業をしたい」との声があった。「お金だけの問題ではなく、いろいろな土地でいろいろな農業を経験してみたい」と山形の農業に関心を寄せる人もおり、潜在的な需要があることも分かった。



JAグループ沖縄から現地の農業労働力事情を聞いた情報交換会

### 宿の確保と交流が大事

情報交換会は、那覇市のJAおきなわ会館と伊平屋村、伊江村の両製糖工場の3カ所で行った。本県関係者は、宿泊先の確保や受け入れ農家とのアットホームな交流が大切なことを再認識した。JAおきなわの製糖工場は離島に6カ所あり、全国を渡り歩く島外出身の季節作業員を中心に2

たれるとの声もあった。寝食を共にし、家族同様に受け入れている農家では「来年もまた来たい」というリピーターを生んでいる。単に労働力として受け入れると翌年以降につながらず、農家や地域とのつながりが大切であることや、危機感を持ち、先々を見越した取り組みも重要なことも学んだ。JAグループ山形地域・担い手サポートセンターの大武義孝センター長は「沖縄の言葉で、助け合いながら順番に労力を交換し合うことを意味する『ゆいまーる』の精神で、両県の産地が共に維持・発展できるような連携ができれば幸い」と話した。JAグループ山形が3月上旬に開設した全国求人サイトを通じ、JAさがえ西村山管内では5月にサクラランポの作業員1人を受け入れる方向で調整に入るなど、広域的な労働力確保の取り組みの成果が出始めている。